

第1回

平成27年度
学習院中等科入学試験

国語

時間 8:40 ~ 9:30

国
A

〔注意〕

1. 試験中は受験票を机の左上におきなさい。
2. 机の上には筆記用具（えんぴつ、シャープペンシル、消しゴム）と受験票以外は出してはいけません。
3. 解答はすべて解答用紙に書きなさい。
4. 始めの合図があるまでは問題を開いてはいけません。
5. 問題の内容についての質問は受け付けません。
6. 試験の終了はチャイムの鳴り始めです。
7. 用がある人は静かに手をあげなさい。
8. ページがぬけていたり、印刷が読みにくかったりした場合は先生に申し出なさい。
9. 試験が始まったら、問題のページ数をたしかめなさい。問題は1ページから13ページまでです。
10. 字数が決まっている問いについては、「、」や「。」も一字と数えます。

— 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

世界が銀色に①ソ¹まったつぎの朝、楓雅（ふうが）はヴァイオリンの自主練をサボった。

サボるといっても、自分でやると決めたことを、今日はやらないと決めなおしただけなのだが、弦（げん）に触（ふ）れない朝なんてひさしぶりなので、なんとも奇妙（きみょう）な感じがした。

その日の放課後に組まれていたピアノ教室も、今日はキャンセルしたいと瑠利（るり）さんに告げた。

「じゃ、自分で先生に連絡（れんらく）しなさい」

瑠利さんは理由も聞こうとしなかった。

英才教育がどうのと言われているけれど、楓雅の家ではだれも——母親の瑠利さんも、父親の正紀（まさのり）さんも、楓雅の習いごとには干渉（かんしょう）しない。やりたいことはやらせてくれるし、協力もしてくれる。けれど、それはあくまで本人の意志（いし）があればこそで、やる気がなくなったらすぐにやめると言われている。

「行ってきます」

さすがに学校はサボらず行った。

ふだんより五分早く家を出たのは、道路に降りつもっていた雪のためだ。ただでさえ、楓雅の家は学区のはずれにあり、学校までの

道のりが長い。

つるつると足をすべらせながらの通学路、楓雅は三体の雪だるまと、ふたりの転倒者（てんとうしゃ）を目撃（もくげき）した。すれちがう小学生たちは皆（みな）、おおいにはしゃいで雪面に足あとを印（しる）している。朝日がのぼるほどに強まる光を②ハンシヤして、一面の雪景色はいよいよ冴（さ）えざえしい。

なにを見ても、しかし、楓雅の気は晴れなかった。

翼（つばさ）に負けた。中一代表の座をうばわれた。それは大きな挫折（ざせつ）だった。大きすぎてその大きさが実感できないほど。

と同時に、楓雅はゆうべ、瑠璃さんに言われたことも引きずっていた。

——楓雅は、だれに聴（き）いてはしくてヴァイオリンを弾（ひ）いているんだろう。

だれに？ その答えが見つからないのと、翼に負けたことは、ぜんぜんちがう問題でありながらも、どこかでつながっている気がする。

地面の雪をでこぼこにする足あとの数は、学校へ近づくほどに増えていく。雪の白をにごす土の色も濃（こ）くなり、校門付近はもう茶一色だ。唯一（ゆいいつ）、グラウンドだけはまだ穢（けが）されておらず、その白を蹴（け）散らすように雪合戦をしているガ

キどもがいると思ったら、おなじクラスの連中だった。

心平、蒼太(そうた)、近藤(こんどう)、ハセカン。いつものにぎやかな四人組に、今日は女子もまじっている。真琴(まこと)、このちゃん、アリス、里緒(りお)。こちらもはなやかな顔ぶれだ。女子たちの集中攻撃をうけ、「ヘルプ、ミー」などと絶叫(ぜっきょう)しているのは、もちろん心平だろう。彼らがはねまわっているのはたしかに雪の上なのに、なぜだかそこだけが―― A ――

そのまばゆさに目を細めつつ、楓雅は校舎へ歩を進め、昇降(しょうこう)しよう(こう)口をくぐったげたばこの前で、今度はヒロと敬太郎を見かけた。

くつの雪をていねいにはらっているヒロと、それをのんびり待っている敬太郎。

楓雅の顔を見るなり、ふたりは品よくほえんだ。

「おはよう、楓雅」

「おはよう、楓雅」

みごとに*シンクロしたその声の健(すこ)やかさに、楓雅はつい腰(こし)が引けてしまう。

「あ……おはよ」

あわててくつをはきかえ、階段へと急いだ。

*ハイテンションなメンツがグラウンドへ出払(はら)っている

女子。怒(おこ)っているのではなく、みんなの机の③ミダれをチエックしているのだ。

久保由佳(くぼゆか)。〈神経質すぎる美化委員〉としてクラス中からうとまれ、最近では日向子(ひなたこ)という姿すらあまり見かけない彼女が、楓雅はみんなが言うほどきらいではなかった。むしろほのかな*シンパシーを抱(いだ)いていた。自分と似たにいがするからだ。

人に合わせるのが苦手で、どこまでもわが道を行く。超ゴーイングマイウェイ。こうした性格は海外じゃ美德とされるのに、日本の社会ではウケが悪い。この国でうまくやるには協調性(きうていせい)というものが重要で、それをもって生まれなかった楓雅は、ヴァイオリンがなかったら自分はどうしていたのだろうとゾツとする。

音楽ばかりやっているからみんなからはずれたわけじゃない。どうしようもなくはずれてしまうタチだからこそ、楓雅には音楽が必要だったのだ。

久保由佳も久保由佳で、見るからにしんどそうな性分(しょうぶん)だ。本人だって、好きで久保由佳に生まれたわけではないだろう。が、気合(きあい)いたっぷりにその運命(しんめい)をうけいれ、どこまでも久保由佳をまっとうしようとするその姿に、楓雅は(2)一目置いていた。後期のクラス委員長に立候補したときにはぶったまげたものの、そのクソ度胸(どきょう)に敬意を表して一票を投じた。

せいか、一年A組の教室にはふだんの騒々(そうぞう)しさがなく、代わりに落ちついたのけさがあった。

(1)廊下(ろうか)側の席(せき)でたがいの髪(かみ)を編(あ)みあっているのは、千鶴(ちづる)、しほりん、レイミー、ゆうかの四人だ。前列(ぜんれつ)でゲーム本を広げているのはノムさん、陸(りく)、イタルの三人。日向子(ひなたこ)と田町(たまち)は窓辺(まどべ)で立ち話をし、吉田(よしか)くんは水泳部(すいえいぶ)仲間のタボに宿題(しゅくどめ)を写させてやっている。

彼らは皆、とくにめだつでもないふつうの生徒(せいと)たちで、なかにはふつうじゃないものもいて、なのに、それぞれが自分の場所をちゃんと確保(かくほ)し、守っている。長く不登校(ふとんがっこう)をしていた田町(たまち)でさえも、いつのまにか。

一年生の修了(しゅうりょう)式(しき)まであと二ヶ月(にげつ)と少し。入学当初(にがくしゅ)は皆がぎこちなく、慣(な)れてからはよくもめごと(めごと)も勃発(はつぱつ)していったA組(あぐみ)だけれど、最近(さいきん)ではよくシャッフルされたトランプ(とらんぷ)みたいな*均整(きんせい)が生まれ、ほとんどの生徒(せいと)がおさまるところに具合(ぐあい)よくおさまったんじゃないかと楓雅(かみや)は思う。

が、なかにはどこにもおさまれず、ジョーカー(じょーかー)みたいにはみだしている自分(みづか)のようなヤツもいる。

楓雅(かみや)の目が最後(さいご)にとらえたのは、教室(きょうし)の後ろで*仁王(におう)に立ちをしているひとりの影(かげ)だった。

ロッカーの前(まへ)でうでを組み、しかつめらしく前方(ぜんぽう)をにらんでいる

もしも彼女(かのう)がいなかったら、この教室(きょうし)は楓雅(かみや)にとって、もっと、ずつといごこちの悪い戦場(せんじょう)となっていたはずだ。

久保由佳(くぼゆか)なら――ふつと思った。久保由佳(くぼゆか)なら、ほくのヴァイオリン(ばいりん)に少しは耳(みみ)をかたむけてくれるだろうか。音を介(か)して世界(せかい)とつながること、その安らぎ(やすらぎ)や高ぶり(たかぶり)をわかってくれるだろうか。

楓雅(かみや)は音楽ホール(おんがくほーる)の④カンキヤク席(せき)にいる彼女の姿(すがた)を⑤ソウゾウし、ようやくうかんだその「顔(かお)」の意外(いがい)さに、くくつと肩(かた)をふるわせた。

もうひとり。

所定(しやうてい)の場所(ばしょ)におさまることがじつに不得意(ふとくでい)なジョーカー(じょーかー)がいた。

「たいへんだったね。いろいろ」

その放課後(はうかご)、楓雅(かみや)はゆうかから教えてもらった病院(びやういん)を訪ね、七階(しちかい)の集中治療(しゆくしゆりやう)室(む)の前(まへ)にある長椅子(ながいす)で、ひさびさに美奈(みな)と話をした。

「おじさん、まだ意識(いしき)もどらない？」

「うん。でも、きつとだいじょうぶって、先生(せんせい)が……。だから、ママもあたしも信じて待(まち)ってんの」

美奈(みな)はたしかに顔色(がんしき)が優(やさ)しなかった。色が白いぶん、よくけいに目の下(した)のくまもめだつ。が、精神的(しんてき)には思ったよりも落ちつ

いているようだった。

「パパ、きつと疲(つか)れちゃったんだよ。いまは、気がすむまで、寝(ね)てほしい」

「会社のこと？」

「うん。でも、会社はつぶれても、家はのこったし。いろいろドラマティックなうわさが飛んでるみたいだけどさ、現実の世界っていうのは、ほとんどのことを、弁護士がじみにかたづけしてくれるもんだよ」

醒(さ)めた口調もいつもどおりの美奈だ。そのことにはげまされて楓雅は切りだした。

「あのさ、美奈」

「ん？」

「(3) 美奈は、年賀状がきらいなんだよね」

「年賀状？」

「前に言ってたじゃん。特別おめでたいことがあるわけでもないのに、おめでとう、なんてバカみたいだって。絶対にそんなこと言いたくないって。だから、今年も書かなかったんだよ。だれにも、ゆうかにも」

横目でちらりとうかがうも、美奈の表情は変わらない。

「ゆうか、美奈にきらわれたって思いこんでるみたいでさ。それで、こわくて会いにこないみたいだけど、そんなじゃないよね」

た。

「なにすんの」

「へんだよ、今日の楓雅」

「へん？」

「人の世話やき？ 楓雅っぽくない」

「ああ……まあ、それはね」

「なんかあった？」

「挫折」

「え」

「ぼく、いま、ヴァイオリンにつまずいてんの」

「あー」

「けどさ、それとは関係なく、美奈のことは、やっぱりぼくだって気になるよ。ほかにともだちいないし、それに、美奈には恩(おん)もあるし」

恩。それについて聞かない美奈の目を見て、あのことを言っているのが伝わったのだと楓雅は思った。

あのこと。

まだ学ランのえりが不快でたまらなかつたころ、楓雅は吹奏楽(すいそうがく)部の先輩(せんぱい)たちから⑥ヨビだされ、延々と入部の勧誘(かんゆう)をうけたことがあった。週二でヴァイオリン教室、週一でピアノ教室、月一で読譜(どくふ)教室に通っていた。

考えすぎだよな」

「つていうか」

だれもおらない廊下の静寂(せいじゃく)に、美奈のかすれ声がエコーをとまなつてひびく。美奈にしては弱気なトーンだ。

「あたしも、なんかこわくなっちゃって」

「ゆうかが？」

「いや、人が……つていうか、自分が」

「どっち」

「わかんない。自分かな。近づきすぎると、ぶつかっちゃうでしょ」

「ぶつかる」

「あたしさ、ほら、わーっと、気持ちとかおさえられなくなって、きついこと言っちゃったりするから」

「ああ……」

「だから、ゆうかが……つていうか、人が、人と近づくの、こわくなったのかも」

切れきれながらも、美奈の言いたいことが楓雅にはわかる気がした。強いようできて、もろい美奈。

「でもさ、ぼく思うけど、こわいつていうのは、それだけ相手が大事(だいじ)なことじゃないの。どうしてもよかつたら、そんなふうには……イテッ！」

いきなり美奈の手に鼻の頭をつままれ、楓雅はうえっとのけぞった。

るからむりだと⑦コトワると、「どうせオレらを見くだしてるんだろ」と、今度は延々いやみを言われた。べつに見くだしてはいなかったのだが、これからは徹底(てつてい)的に見くだしてやろうと心に誓(ちか)いながら教室へもどると、サッカーボールが床(ゆか)に落ちていた。

腹立ちまぎれに蹴(け)とばした。

と、かつてないほどの球は華麗(かれい)な飛翔(ひしょう)を決め、ベランダへ続くガラス戸を粉々にしたのだった。

やばい。問題になる。入学早々、教師たちから目をつけられてしまふ。早退や欠席をしづらくなったら、ヴァイオリンのレッスンにさしさわる。

一も二もなく楓雅は逃(に)げようと決めた。

ところが、ダッシュで駆(か)けよつた扉(とびら)の前には、いつのまにかひとりの女子が立っていたのだった。

見られた。おしまいだ。がくんと肩を落とした楓雅に、しかし、その子——美奈は親指を突(つ)きたてて言った。

「ナイッシュー！」

当時すでに男子の輪からはずれていた楓雅が、美奈についてまわるといふようになったのは、それ以来だ。

あの一件をだれにも言わずにしてくれた恩人。久保由佳とはまた別種の(一) B (一)をもつ美奈を、楓雅は⑧タンジュンに

慕(した)っていた。美奈とゆうかと三人、軽いノリでいっしょにいるのが楽しかった。なのに、こじれたとたんに逃げだした。美奈とゆうかがもめたとき、女子同士の感情のもつれに巻きこまれるのがめんどろで、ふたりに事情を聞こうとしなかった。

その後ろめたさを胸に、楓雅は言った。

「ばく、美奈とゆうかつて、やっぱりいいコンビだと思うよ。めらめらした火とじめじめした水みたいでさ」

「めらめら？」

「このままクラス替(が)えになっちゃってもいいの？」

「(4)……」

「なんか、できることある？ ゆうかに伝言とか。いまのうちだよ。ばく、そんなに長いこと挫折してる気ないから」

長椅子のへりに足をかけ、体育ずわりの姿勢で美奈がおしだまる。

だいぶ根本が黒くなってきた茶髪(ちゃばつ)のあいだから、真剣(しんけん)に考えこんでいる横顔がのぞく。

「じゃ、ゆうかに伝えて。あたし、年賀状の返事なんか死んでも書かないって」

「(5)……マジ？」

「おめでたくもないのにおめでとうなんて、一生、だれにも言わない。ハッピーでもないのにハッピーニューイヤーなんて言わない。

なにがよろしくてなにがよろしくないのかもわかんないのに、今年

もよろしく、なんて口がさけても言わない」

美奈は一気に吐(は)き出し、ぶいと顔をそむけた。

「でも、パパが目覚めたら、そのときは、ゆうかに言うよ」

「え」

「ゆうかに、一番目に言うから。そう伝えて」

(6) 楓雅はしばしば息を止め、それから「うん」「うん」と立てつづけにうなずいた。

「わかった。すぐ伝える。絶対、伝えるから」

しかし、その必要はなくなった。

楓雅から顔をそむけたまま、体育ずわりの体をゆらゆらさせていた美奈の体が、ふいにびたつとかたまった。そのかたまりかたはカチンと音がするほどで、ふしぎに思った楓雅がその視線を追うと、廊下のむこうから歩みよってくる人影があった。

ゆうかだった。やはりカチコチに緊張(きんちょう)し、一歩一歩、水でもかいて進むように歩みよってくる。

「楓雅」

「ん？」

「やっぱり、自分で言う」

そうつぶやいた美奈の瞳(ひとみ)から、雪どけのひとしずくみたいな涙(なみだ)がつうつとこぼれおちた。

森絵都の文章による

*挫折 がんばっていたことが、だめになること。

*シンクロ 重なり合うこと。

*ハイテンション 感情が高ぶった状態のこと。

*均整 きちんとしたつりあい。

*仁王立ち 力強く足を広げて立つこと。

*シンパシー 同情や共感。

問一 ぼう線①から⑧のカタカナの部分の漢字に直しなさい。

問二 「A」に入る言葉として、最も適当なものを次から選び、その記号を書きなさい。

ア 雪でこおりついたみたい

イ 真夏のようにぎらぎらして

ウ 時がとまってしまったように

エ ほのぼのとしてすがすがしく

問三 波線(1)の光景を見ている時、楓雅はどんな気持ちだったかを十字以上二十字以内で書きなさい。

問四 波線(2)の言葉の意味を説明しなさい。

問五 波線(3)の質問を楓雅がした理由を三十字以上四十字以内で書きなさい。

問六 美奈はどうしてゆうかと会わなくなったのですか。その理由として、最も適当なものを次から選び、その記号を書きなさい。

ア パパの会社がつぶれて病気になり、家のことで、余計な心配をかけたくなかったから。

イ 精神的にも肉体的にも弱くなっている自分のことを見られるのが、はずかしくもあり、くやしきもあったから。

ウ 二人の仲がぎくしゃくしたときに、楓雅が逃げたため、会えなかったから。

エ 仲良くなりすぎて、自分の気持ちがおさえられなくなり、きついことを言ったりするのがこわかったから。

問七 「B」に入る言葉を文章中から五字で探して書きなさい。

問八 波線(4)(5)で美奈と楓雅が感じている気持ちの組み合わせとして、最も適当なものを次から選び、その記号を書きなさい。

ア (4)とまどい (5)おどろき

イ (4)よろこび (5)いかり

ウ (4)迷い (5)あわれみ

エ (4)はん発 (5)同意

問九 波線(6)のように楓雅がなった理由として、最も適当なものを次から選び、その記号を書きなさい。

ア 美奈の表情やはく力に圧とうされ、言葉を失ったから。

イ 不器用な美奈をかわいそうに思い、同情したから。

ウ 美奈のゆうかを大切に思う心に胸が熱くなったから。

エ 美奈の答えが予そう通りで、心からなっとくしたから。

問十 この文章を「楓雅がくする物語。」または、「楓雅がくする物語。」という一文でまとめなさい。ただし、「く」に入る言葉は「する」「なる」をふくめて三十以上四十以下とする。

二

次の文章は、生物学者の中村桂子と、イラストレーターの和田誠による、深海の生き物に関する対談です。文章を読んで、後の問いに答えなさい。

中村 「しんかい」っていう船、ご存知ですか。

和田 はい。丸っこくてしずむやつ。

中村 「しんかい2000」は二千メートル、「しんかい6500」もあります。日本の潜水船（せんすいせん）の技術はとも進んでいます。六千五百メートルまで行ったらすごい圧力ですから、それにたえられる構造が必要で、そのために……

和田 丸っこくなってるんですね。

中村 船の断面はだ円形、人が乗るところは直径二メートルの球。その形がいちばん A ですから。地球上の生き物というと、人間がいて、木が生えていて、そこに鳥が飛んだり、地中には微生物（びせいぶつ）がいたり、ミミズがいたり。土が支えています。そういう生き物の世界って、地球のまわりのものすごくうすいところ。

和田 リンゴで言えば皮くらい。

中村 もっとうすいかな。ですから、ほかのところはどうなってるのか、知りたいじゃないですか。宇宙に飛んで行きたいとか。月まで行ったのがいちばん遠いですけど、毛利衛（もうりまもる）さん

や向井千秋さんが乗ったスペースシャトルは三百キロ、今作ってる宇宙ステーションで四百五十キロ。月や太陽と比べると……

和田 近所なんだ。

中村 皮にちよこつと点がついてるくらい。しかも、①ザンネンながら生き物はいません。もう一方で中の方をのぞいてみたい。まずは海ですね。海は地球の表面の七〇パーセントって言われてますでしょ。海といっても、私たちが海水浴してるのは、まあ皮の一部。大陸棚（たいりくだな）って本当に皮ですよ。だけど大陸棚が終わると、急に深くなって、いちばん深いのがマリアナ海溝（かいこう）とか日本海溝のあたり。一万一千メートル。十一キロって元気な方はお昼にジョギングできるくらいのきよりですけど、でも、そこへ行くのは（1）宇宙へ行くより難しい面もある。

和田 水の中の方が大変なんですね。

中村 いちばん大変なのは水圧。それに、まったくお日さまの光が②トドきませんから、暗くなるし、冷たくなる。そんなところに生き物がいるわけじゃないと思われてたんです。

和田 でも、いるんですね。

中村 「しんかい」で調べ始めたのが、一九八〇年代。宇宙よりかなりおそい。海はずうっと暗黒の世界だった。*ジュール・ヴェルヌっておもしろい人で、私たちがどうなってるんだろうと思うことは、みんな先に書いてます。『 B 』とか。

和田 『月世界旅行』も書いてますね。ぼくはそういうお話が好きだったから、深い海にもなんかわけわからないものがあるような気がしてました。

中村 *H・G・ウェルズの火星人とか。未知の生き物を考えるのは楽しい。

和田 だいたいぼくらの知ってる動物のすがたを思いうかべてたでしょう。

中村 タコみたいだったり。

和田 火星にすむのも深海にすむのも。

中村 深海には本当にちっちゃなタコがいるんですよ。五千メートルくらいのところに。

和田 そうなんですか。

中村 火星には、タコは見つからないでしょう。ウェルズの言うような宇宙人がもしいるとしても、太陽系の外ですね。

和田 太陽系の外に地球と同じような条件の星があれば(2)……

中村 それはたくさんあるはずなんですけど、遠すぎて通信できない。だから、宇宙は生物学者から見るとまだ(3)夢の領域なんです。海の方は、生き物がいることがほとんどわかっています。

和田 新しいものが発見されてるということですね。

中村 「門」という動物の分類としていけば大きなたん位のところで、新しいものまで見つかっています。でも、新しいんだけど古い。

ます。深海底には多様な生き物がいて、その種の数も熱帯雨林に匹敵(ひつてき)すると言われています。無脊椎(むせきつい)動物門のほとんどがいて、新種も見つかりそうだし。ただえさが少ないですから、量は多くありませんけど。写真で見たタコなんて、かわいいんですよ。

和田 やっぱ八本足。

中村 もちろん。ナマコも写りました。

和田 ナマコはいかにいそうだな(笑)。

中村 お魚の形がおかしくて、ソコダラ科っていうのは、後の方ほど細くて、しっぽはネズミみたい。有名なのがハオリムシ。先っぽにエラがあつてヒラヒラしてるのが⑤ハオリみたいだっていうんでこの名前がついたんですけど、英語ではチューブワーム。

和田 「管虫」ですね。

中村 先っぽが赤くてきれいなんですけど、これ、まさにチューブです。ハオリムシも動物ですから、ものを食べなきゃいけない。だけど、口もなければ腸も肛門(こうもん)もない。生物学者はあじも素っ気もないことを言いますが、実は生き物って全部筒(つつ)なんです。

和田 人間も。なるほど口から肛門まで筒ですね。

中村 上に穴があつて、下に穴がある。動物を大きく二つに分ける

和田 見つかったのは新しいけど。

中村 いたのは古くからだろうと。それが今、どんどん見つかるんです。海の深いところでどうやって生きてるんだろうという③キヨウミがありますし、かれら特有の特殊(とくしゅ)能力があるとすれば、それを利用できないかというお金もうけからの関心もあつて、深海を調べることは、最先端(さいせんたん)テーマの一つです。

和田 でも、乗ってみると恐怖(きょうふ)感もあるでしょうね。

中村 このあいだ毛利さんが乗って、宇宙船よりこわいって、かんそうを述べてらっしゃいましたね。

和田 小さいですね。

中村 ④ソウジュウ士二人と研究者一人の計三人しか乗れません。

宇宙船は居住空間が快適になってますからね。海の方は何日もいるわけじゃありませんけど。

和田 閉所恐怖症(しょう)だったらダメですね。

中村 ああ、私ダメです(笑)。でも、外はおもしろいだろうな。やっぱり見てみたい。

和田 見えれば。

中村 窓があつて、照らせば見えますし、カメラで撮影(さつえい)してる。宇宙と同じで、マジックハンドで海底の土や生き物をとることもします。海底の土の中には微生物が百種類くらい見つかるんです。

と、前口動物と後口動物に分かれるんです。最初にできた原口が口になる仲間と、肛門になる仲間と。

和田 人間はどっち？

中村 後口動物。でも、ハオリムシは筒だけ。もちろん生き物ですから細胞(さいぼう)でできています。その細胞の中に微生物がいるんです。

和田 共生？

中村 生物学用語が「C」と口に出るようになった。すばらしい(笑)。細胞の中に入りこんでる共生です。植物の葉緑体(ようりょくたい)やはり細胞に共生した微生物からできたんです。日光を受けてでんぶんを作る微生物で、それがいてくれれば植物はありがたい。微生物の方も敵が来なくてすみやすい。両方であつて共生してるうちに、微生物は自分で独立して生きる必要がなくなって、光合成だけをする葉緑体になっちゃった。

和田 ふーん。

中村 細胞の中で微生物が暮らすってことは、大昔にはよくあつたと思うんです。ハオリムシの中の微生物は真っ暗なところにいるんですから、お日さまは関係ない。実は、海底の生き物たちがたくさん生きてる場所を見ると、熱水がふき出しているんです。

和田 マグマから来るもの？

中村 そうでしょう。箱根⑥オンセンが海底にあるようなもので、

硫化(りゅうか)水素やメタンを出しています。この微生物は硫黄(いおう)をエネルギー源にして、それから養分を作って、ハオリムシを育ててくれるらしいんです。お日さまがなくても暮らせるのはなぜかという疑問が、これで解けたんですね。

和田 で、その熱水というのは熱いんですか。

中村 私たちは一気圧のところまで生活してるから、水は百度で⑦スイジヨウキになると思ってますけど、海底は圧力が高いから百度でもすいじょうきにならない。富士山頂は気圧が低いから八十何度でも沸騰(ふつとう)しちゃう。その逆です。三百五十度のお湯が出る場所もあるとか。

和田 そのあたりの生き物は熱くても平気ってことですか。

中村 ふき出すところは熱くても、まわりは冷たい水ですから。

和田 そうか。すぐぬるくなるんだ。

中村 海底は、まあ言ってみれば砂漠(さばく)みたいなものですけど、ここはオアシスみたい。

和田 あったかくて。

中村 養分が作れるところだから、そのへんに生き物がいて、一つ生き物がいれば、それを食べる生き物も出てきますから、魚も生きられるようになってくる。中には少し上の方へ上がっていくものもいるみたいですし、圧力の変化にどう対応してるのか。海の中をきちんと調べなきゃいけませんね。

和田 つまり、生命誕生のヒナ形のようになってるってことですか。

中村 微生物も進化しますから、生命誕生のときのままではないでしょうけど、熱水噴出口(ふんしゅつこう)のあたりは、昔を思わせる姿が見られておもしろい。進化していても、環境(かんきょう)がほとんど変わってませんから、地上へ上がった私たちのように環境との関係がどんどん変わってきた生物に比べれば、昔のすがたを割合のこしてるんじゃないかな。

*ジュール・ヴェルヌ フランスの小説家。

*H・G・ウェルズ イギリスの小説家・評論家。

問一 ぼう線①から⑦のカタカナの部分漢字に直さない。

問二 文章中の「共生」とはどういうものですか。文章中に書かれている具体例を用いて、五十五字以上七十五字以内で説明しなさい。

問三 一 A 一に入る言葉として最も適当なものを次から

選び、その記号を書きなさい。

ア かつこい

イ こわれにくい

ウ 丸っこい

エ 乗りやすい

問四 波線(1)のように考える理由を三十字以上四十字以内で説明しなさい。

明しなさい。

問五 一 B 一に入る書名として最も適当なものを次から

選び、その記号を書きなさい。

ア 失われた世界

イ 宇宙戦争

ウ タイムマシン

エ 海底二万里

問六 波線(2)で省略されているところに入る、適当な言葉を考えて書きなさい。

問七 波線(3)の説明として最も適当なものを次から選び、その記号を書きなさい。

記号を書きなさい。

ア 新しいものが発見されるようになり、多くの人が志す領域。
イ わからないことが多すぎて、おもしろみのない領域。

ウ 確かなことが何もわからないので思いえがくしかない領域。

エ ようやく研究がされたはじめた生物学としては最前線の領域。

問八 一 C 一に入る言葉として最も適当なものを次から

選び、その記号を書きなさい。

ア スラッ

イ スタスタ

ウ モタモタ

エ ソツ

問九 文章の内容にあっているものを次から選び、その記号を書きなさい。

ア 海底で生きている生き物たちは、地上へ上がった私たちと同じように生命誕生のときのままのすがたをしている。

イ 海底の生き物たちは、お日さまに関係なく、熱水が出ているところで養分を作り出して、暮らしている。

ウ 深海底で新しい生物が誕生していて、その新種の生物がどんどん発見されている。

エ 深海底にも生き物があるが、えさが少ないので、限られた種類の生き物しか見つからない。

物語 ○